

## 新刊 Book Reviews

□小川晃司 他：自然保護と開発—箱根を守る会50周年記念 A4. 100 pp. 2016. 箱根を守る会. ISBN no number.

江戸時代に Kaempfer, Thunberg, Siebold らが長崎から江戸への参府途上に通り、その景観や目に触れた植物、動物等を、彼らの紀行記に記録し、賞賛を惜しまなかった箱根は、平坦地が少なく、火山由来の峻厳な峡谷や湿地などが広範囲を占める地理的な特性によって、江戸時代は天然の要塞として、また明治時代以降は耕作適地の少なさ等から、その自然が比較的良好な状態で維持されてきた。幕末から明治初期には横須賀の製鉄所に医師として勤務していた Savatier はしばしば箱根を訪れ採集し、その標本は今パリの自然史博物館に保管されている。底倉の旅館「鳩屋」主人、澤田武太郎（1899–1938年）は本誌に「箱根植物雑記」などを発表したが、ハコネアザミ、ハコネラン、ハコネメダケなどを発見し、箱根の自然の保護にも尽力した。

1960年代の日本の高度経済成長期に、優れた自然景観や環境を有する地域においても無謀な開発が及び貴重植物の盗掘も急増した。上記の背景を受け、また国立公園、国際的観光地として箱根の自然保護を目的に1966年に発足したのが「箱根を守る会」である。結成に關ったメンバーのひとりが、箱根の植物に精通した松浦正郎である。松浦の父、茂寿（1898–1957年）は、武藏高校の生物教員で、1958年に「箱根植物目録」を刊行している。その他、田代道彌をはじめ植物に詳しい会員が会の活動に参加してきた。この記念号に

も陣野一郎・松岡輝宏の「シダ植物 昔・今」が載る。

本書の最後に載る「箱根を守る会 50年のあゆみ」をみると、箱根地域の植物や植物群落に影響を及ぼす懸念が大きい開発や道路開削が国や企業から多数提出され、これらへの会の対処が記載されている。なかには行政が絡んだ案件もある。興味を引くのは、よくある何でも反対団体と異なり、関係者との協議を積み重ねてきた姿勢である。良好なヤマボウシ・ブナ林やオトメアオイなど貴重な生物を含む地域に計画されたさる美術館計画では、民事調停には「ブナ林とそこに生息する生きものたち」が申立人となり、マスコミ等で取り上げられ話題になった。このような多くの環境問題への取り組みを通して会は環境省や県・町との良好な関係を築いていったことが判る。

また、会では箱根の景観・自然ならびにその美しさを世界に紹介した先の Kaempfer と英人貿易商で箱根を愛し居住した Cyril Montague Birnie を讃え、顕彰するケンペル・バーニー祭を1986年以来開催し、2016年にはその30回目が開催されていて、先の会50年のあゆみには毎回の演題などが記載されている。

植物の多様性保全では、ハコネコメツツジの山取り株が200株以上も「天然記念物」の名札を下げて売られ、しかも、「金になるんだから、山取りは跡を絶たない」と豪語する業者の暗躍ぶりには暗澹たる気持ちになる。このような問題も含めて、自然保護・保全に関する方々に、この会が歩んだ50年の歴史とそれを紹介・総括する本誌は多いに参考になるであろう。問合せ先は箱根を守る会 250-0311 神奈川県足柄下郡箱根町湯本 386-66まで。

（大場秀章 H. OHBA）

## 第92巻2号 正誤(2017)

## Errata in Vol. 92 No. 2 (2017)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
71	Fig. 1	cap. ↓1	(TNS0127073)	(TNS01270753)
111	left	↑2	(Clarke 27207A)	(Clarke 27207F)
111	Japanese abst. right	↓2	(Clarke 27207A)	(Clarke 27207F)